

まつ なが じ あん ふゆ ちや じ 松永耳庵 冬の茶事

会期 2026年10月22日|木|-2027年1月11日|月・祝|

会場 松永記念館室



松永耳庵
※国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>) より転載



出品No.7 伝・尾形光琳《金銀泥梅花図》

松永耳庵〔安左工門〕(1875-1971)は長崎県壱岐に生まれ、慶應義塾へ進学し福澤諭吉に学びました。福岡での鉄道事業を足掛かりに電力業界で活躍し、やがて全国の電力業界を代表する実業家となりました。近代数寄者の双璧であった益田鈍翁〔孝〕(1848-1938)、原三溪〔富太郎〕(1868-1939)らに導かれ、「耳庵」と号して茶の湯の世界に足を踏み入れたのは還暦を迎える頃。精力的に茶道具の名品を蒐集しながら、新しく構えた別荘「柳瀬山荘」(現・埼玉県所沢市。主屋の「黄林閣」は国指定重要文化財)にて茶の湯三昧の日々を送り、瞬く間に高名な茶人となりました。終戦後、神奈川県小田原市に構えた別荘「老樺荘」(国登録有形文化財)に転居したのは昭和21年(1946)の12月。戦前・戦中に蒐集した茶道具の大半は柳瀬山荘とともに国へ寄贈しましたが、再び蒐集を開始し、茶の湯生活を新たにします。転居して約3年後に電力事業再編成の主導役に抜擢されてからは激務の毎日を送るようになりますが、その最中にあっても間隙を縫って茶事を催し、多くの人々をもてなし、喜ばせ、そして自ら愉しんだのでした。

当館に寄贈された松永コレクションの殆どは、松永が小田原転居後に蒐集したものです。その頃の松永の茶事の様子は、最も親しい茶友の一人であった仰木政斎〔政吉〕(1879-1959)が残した『雲中庵茶会記』(1958年頃)に多く記録されています。

本展では、本書の記録に基づき、松永が冬の時期の茶事に用いた茶道具を、当館所蔵の松永旧蔵品により再現的に紹介いたします。 [学芸課長 後藤 恒]

3 白雲集残巻

宗峯妙超 (1282-1337)
紙本墨書 卷子装 21.8×264.2cm
鎌倉時代 14世紀

4 備前矢筈口水指 共蓋

陶器 高17.7 胴径18.2cm
桃山時代 16世紀

5 黒楽茶碗 銘「小太郎ヶ淵」

益田非黙 (1852-1903)
陶器 高8.1 胴径12.5cm
明治時代 19-20世紀

6 黒楽茶碗 銘「次郎坊」

長次郎 (生没年不詳)
陶器 高8.4 胴径11.2cm
桃山時代 16世紀

7 金銀泥梅花図

伝・尾形光琳 (1658-1716)
紙本金銀泥 掛幅装 66.5×37.6cm
江戸時代 18世紀

8 菊文蒔絵螺鈿入四方香合

木胎漆塗 高3.0 幅・奥6.2cm
鎌倉時代 13世紀

9 古雲鶴筒茶碗

磁器 高10.1 口径12.7cm
朝鮮王朝時代 16-17世紀

10 黒織部筒茶碗 銘「さわらび」

陶器 高9.7 口径9.3cm
桃山時代 16-17世紀

11 伊賀種壺花入

陶器 高25.1 最大径15.3cm
桃山時代 16世紀

12 杜子美図

伝・雪舟 (1420-1506) 画、
天隠竜沢 (1422-1500) 賛
紙本墨画 掛幅装 79.6×16.9cm
室町時代 明応7年 (1498)

13 菩薩半跏思惟像 (重要文化財)

銅鑄造 総高 28.3cm
飛鳥-奈良時代 7-8世紀

14 茶杓 共筒

沢庵宗彭 (1573-1645)
竹製 長18.3cm
江戸時代 17世紀

15 粉吹茶碗 銘「十石」

陶器 高7.8 口径14.7cm
朝鮮王朝時代 16世紀

次回展示予告

【古美術企画展示室】

◆〔企画展〕カンボジアの染織―描かれた祈り― 12月2日(水)―2027年2月7日(日)

カンボジアは石造建築や彫刻だけでなく、染織の分野においても素晴らしい伝統があり、特に、絹の緯絛は絵画的な表現を可能にするほどの繊細巧緻な技術で世界的に知られています。当館のコレクションを中心に緯絛や紋織、絞などの名品を展示します。

【松永記念館室】

◆茶道具と銘

2027年1月13日(水)―3月28日(日)

銘とは、優れた茶道具に付けられた別名や尊称のことです。本展では、この銘に注目しながら松永コレクションの名品を中心にご紹介します。

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

- [凡例]
- 下記3件の茶事の記録は、仰木政斎著『雲中庵茶会記（影印本）』2冊組（味岡敏雄編集・発行、1997年）の記述から抽出、整理、列挙したものです。
 - 招客及び内容の記載順は原文の記載順に従っています。
 - 茶室名及びその中の各室は◆で示し、道具の列挙は「／」で続けます。
 - 茶事の流れを示す懷石、中立、後座、濃茶、薄茶などの情報は、< > や【 】で示しています。
 - 本展の出品作品に同定される道具には、太字（ ）で本展出品番号を付しています。
 - 誤字とみられる、または古い表現は原文通りに記して、（ママ）を付しています。

益田鈍翁を偲んで

昭和29年（1954）12月28日（日）条

（出典：『雲中庵茶会記』戦後・448頁「松下軒鈍翁忌の茶」）

〔招客〕益田貞子、近藤国手、斎藤柴庵、縣治朗、福住女将、仰木政斎
◆八畳大炉の間：古材の大柱に光琳筆布袋蹴球即ち鞠をケ上し幅を掛け／大炉 鈍翁好み大金をツルシてある 【食事】大炉を囲み喜三郎膳に根来椀にて、向 胡瓜モミ海老 魯山人皿にて／七面鳥入 そば／ホロフキ大根など／菓子 そば饅 <後座>
◆小間四畳半：【濃茶】床 遠州公作二重切竹花入 掃雲台 太郎庵椿にご自園の早咲梅を添え／書院 鎌倉時代の千鳥蒔絵の乱盆に大燈和尚の白雲集と称する巻物【3】／水指 古備前矢筈口【4】／茶入飾り翁は無造作に仕込茶碗を運れた／茶碗 克徳翁手造り 銘小太郎ヶ淵【5】／茶入 土屋蔵帳と云ふ根来／茶杓 針屋春春作煤竹銘さむは／濃茶 御園の春【薄茶】外遊土産のペルヤー（ママ）茶碗／長次郎作とか云ふ黒茶碗【6】【余興】斎藤老持込み元僧無口和尚の画賛 対月の幅を展示

12月28日は、耳庵を茶の湯の世界に導いた益田鈍翁の命日。この日、耳庵は、鈍翁の妻・貞子や鈍翁の主治医であった近藤（「国手」とは医者に対する敬称）らを招いて、鈍翁追善の茶事を老樺荘主屋内で催しました。じつは前年、主屋内に新設した四畳半台目の茶室「松下亭」の席開きの茶事もこの日に行い、鈍翁追善の趣向を凝らしたのでした（『雲中庵茶会記』戦後・359頁「小田原松下軒新席開をかね鈍翁忌」）。

松下亭茶室の北側に隣する八畳間で食事。大炉には「鈍翁好み的大釜」をつるしました。松下亭に移り、濃茶。床には、鈍翁が小田原に構えた広大な別邸「掃雲台」の太郎庵椿を小堀遠州作竹花入に活け、書院（肘掛窓）には鈍翁旧蔵の宗峯妙超《白雲集残巻》の卷子【3】を飾りました。茶碗は鈍翁の弟・益田非黙〔克徳〕（1852-1903）作の《黒染茶碗 銘「小太郎ヶ淵」》【5】。非黙は鈍翁の4歳下の弟で、兄より早く茶の湯に親しみ、鈍翁を茶の湯の世界に導いたともいわれます。作陶の才にも秀で、いくつもの優れた作品を遺しており、【5】は代表作の一つです。

このように鈍翁ゆかりの道具を用いた茶事を、政斎は「（耳庵）翁の茶が、無頓着であるのも其半面、他の及ばざる興味と友愛がこもっている」と評しています。

大寒の松下亭

昭和32年（1957）1月27日（日）条

（出典：『雲中庵茶会記（影印本）』戦後・628頁「小田原松下軒の茶」）

〔招客〕谷川徹三、栗山添光、仰木政斎
◆寄付に当られし廊下：見事な白熊の敷物、お湯の用意／汲出 民芸茶碗／振出 織部の珍品
◆大炉の部屋：壁床 光琳筆泥描梅の絵光悦讃【7】／大炉 釣釜罌口 天正元年五月日芦屋と記年がある 【食事】膳 松木溜四方／向 越前海老甘酢 器鼠志野地紙形三ツ椀杯そへ／翁は又須恵器高坏へ海老、銀杏、松葉刺片手に銚子を携へ、正月気分の祝い酒を進られた。杯 天目、刷毛目、赤絵信楽／釜は銀大鍋と替り、チリ鍋 鴨、鰯、海老、人参と野菜の煮込み／菓子 縁高にて柚子形蒸し豆 <後座>
◆四畳半席：【濃茶】床 右府実朝筆 日課白描観音之像【パネル展示】／床内 金地螺鈿入散菊香合【8】／書院 金欄手仙蓋瓶の美、洋種蘭花が挿れている／炉中 芦屋広口地紋遠山鐙付の釜／台目棚には袋かけ／茶入の備へ／水指 備前矢筈口【4】／茶碗 長次郎作銘捨子 箱裏書蓮源斎如心添口紙黒染／茶入 名物浅野肩衝／茶杓 道安作 共筒に桑山猪兵衛殿所持により書之 片桐石見守と【薄茶（水戸忠点前）】茶碗 古雲鶴筒【9】魯堂旧蔵 替黒織部筒 銘蔵（ママ）【10】／茶入 黒根来／茶杓 仰木政斎作 耳翁筒書一閑張 杓裏朱書七二（花押）

二十四節気の最後にあたる「大寒」（1月20日頃-2月4日頃）に、耳庵は、哲学者・谷川徹三（1895-1989）、料亭「八百善」当主・栗山添光〔善四郎〕（1883-1968）、そして政斎を老樺荘に招いて茶事を催しました。大寒は一年の間で最も寒さが厳しくなる時期ですが、この日は政斎によれば「五月初めとも思われる温かい日」で、小田原へ向かう途中で雨に見舞われたそうです。

三名の客は、大炉のある八畳間へ通されました。壁床には伝・尾形光琳《金銀泥梅花図》【7】。この作品は、金泥と銀泥のみで梅の絵を描き「誰云春色従東到、露暖南枝花始開（春は東からやってくるとは誰が言ったのだろうか。南の枝から花は咲き始めているではないか）」という和製漢詩が書かれており、耳庵がまだ茶の湯の世界に入っていくばくもたたない昭和11年（1936）に購入してより、毎年一月には必ずとあってよいほど茶事に用いた愛蔵の掛軸でした。春の到来を想う心情を表現したこの詩は、はからずも寒さが和らいだこの日にあって、客人の心にひとしおの共感をもたらしたことでしょう。懷石においては、須恵器の高坏にエビと銀杏松葉刺しを盛り、天目、刷毛目、赤絵信楽の盃を配って「正月気分の祝い酒」。その後、

大炉に掛けていた釜を銀の大鍋に替え、チリ鍋を振る舞いました。

いつしか雨は止み、中立の時には「廊下ではカーテンを引く程の陽気」となっていました。松下亭茶室の床には鎌倉幕府三代将軍・源実朝の筆と伝える《日課観音図》【パネル展示】。それに合わせるように鎌倉時代の《菊文時絵螺鈿入四方香合》【8】。濃茶碗に長次郎。薄茶碗には《古雲鶴筒茶碗》【9】、替えに《黒織部筒茶碗 銘「さわらび」》【10】と、春のおとずれをほのめかす筒茶碗が用いられました。谷川徹三、栗山添光ともに茶趣味に深く、茶談に花を咲かせ「激務中の寸閑を茶友に一日の清遊を与へられ列坐満足であった。」と政斎はこの茶事の記録を締めくくっています。

“老巧の侘茶人” 栗山添光持ち込みの花入

昭和30年（1955）2月20日（日）条

（出典：『雲中庵茶会記（影印本）』戦後・464頁「松下軒急電の茶」）

〔招客〕栗山添光、仰木政斎
八百善老携帯の振出青井戸／伊賀の花入【11】
◆八畳大炉の席：築紫水城古材大柱には時代古竹扁平花筒に数椿一輪／釣釜のかまへ／膳 松花室好画かわり角／向 小海老に胡瓜あへ 古瀬戸の皿／汁 地味噌ナメコ／採り魚 紅鰯薫製外二種 鉢古染付／徳利には外遊土産両口藍画／北国神通川名産紅鰯口寿司
◆四畳半茶席：【濃茶】床 雪舟杜子美の画【12】／書院 飛鳥朝惟思の尊像一軀【13】／水指 古刷毛／茶入 春慶墓の金林寺 箱書に此の金林寺茶器は、千宗易春慶に作らしめ〜半堤庵誌之／茶杓 沢庵和尚共筒 筒に初冬のかこひのうち〜【14】／茶碗 粉引銘鈍翁筆にて十石【15】【薄茶（松永一子点前）】茶碗 早乙女とある光悦作赤筒 替鬼熊川

暦の上ではすでに春。2月20日は、二十四節気では「雨水（降る雪が雨へと変わり、積もった雪や氷が溶けて水になり始める頃）」にあたります。前夜、耳庵から電話で急な誘いを受けていた政斎はこの日、朝から雨の中を小田原へ。老樺荘に着くと、先客に栗山添光〔善四郎〕。東京の老舗料亭「八百善」の八代当主である添光は、政斎をして「老巧の侘茶人」と称せしめる高名な数寄者でした。

このとき添光が持参した包みから取り出したのは《伊賀種壺花入》【11】、まだらに降りかかった自然釉が苔むした岩のような風情をみせる古伊賀の佳品です。『雲中庵茶会記』において政斎はこれを図示した上で「火度も強く、コゲもあり、作行豪健、〈中略〉寸法等耳翁には真向の花入である」と評しています。この持ち込みは、おそらくは耳庵への斡旋だったのでしょう。本器を収める箱の蓋裏には耳庵が「昭和丙申年春

／八百善栗山氏ヨリ来／耳庵（花押）」と書きつけています。「昭和丙申」は1956年。つまりこの茶事の一年後に、本器を手中に収めたことがわかります。

さて中立後、松下亭茶室へ。床に掛けられた伝・雪舟《杜子美図》【12】は、政斎の兄で建築家の仰木魯堂（1863-1941）愛蔵の掛軸で、政斎を通じて耳庵の手に渡ったものでした。魯堂は侘茶をよくし、耳庵の茶に大きな影響を与えた人物でもありました。書院（肘掛窓）には飛鳥〜奈良時代の金銅仏《菩薩半跏思惟像》【13】が鎮座。本像は実業家・郷誠之助（1865-1942）旧蔵の国宝（当時）で、政斎によると耳庵が最近求めたもので「この尊像を前に茶を頂く光栄」と。濃茶に用いた《粉吹茶碗 銘「十石」》【15】は政斎の旧蔵で、耳庵が熱海に構えた茶室「十国庵」に因み、益田鈍翁によって命銘された高麗茶碗。というように、招いた茶友との思い出をちりばめた道具組でした。薄茶に用いた光悦の赤染茶碗には「^{茶こ}詢に近来になき眼福」と感興を綴っています。

出品作品リスト

※全て当館の所蔵品で、No2〜15は松永コレクションです。
※都合により展示作品を変更する場合があります。

1 「花紅葉」

松永耳庵 [安左工門]（1875-1971）
紙本墨書 掛幅装 68.0×16.5cm
昭和36年（1961）頃
2024年度 渡辺正尋様寄贈

^{はなもみじ}
「花紅葉春夏秋冬のいろよりも冬の雪こそ清きかりけり」と、数え87歳の松永耳庵が揮毫した、冬の風情を愛でた自作とみられる短歌です。耳庵らしい闊達自在で飄逸な趣きは、能書家としての耳庵の一面を存分に示しています。

2 古唐津茶碗 銘「老鶴」

陶器 高8.4 口径14.4cm
桃山時代 16-17世紀

松永が茶友・河瀬無窮亭〔虎三郎〕（1888-1971）から譲り受けた茶碗。見込みに「の」の字を書くように鉄釉の一筆模様を施しており、鶴が首を垂れた姿のように見えるその形が銘の由来となったのでしょうか。松永はこの茶碗を晩冬初春の茶事でよく用いました。